

## 生活力を高める指導をめざして

### — 調理活動を中心にした実践 —

小 村 のり子

#### I はじめに

一、朝日かがやく	大空に	二、明るい社会	夢にみて
伝統守る	学び舎よ	幸せ創る	学び舎よ
明日に向かって	元気よく	集いて進まん	限りなく
明るい希望	創るため	島大附中	養護学級

これは、養護タイムと呼んでいる朝礼で毎日歌う学級の歌である。生徒の一日は、この歌で元気にスタートする。夢と希望をもち、明るく社会生活が送れることを願って、歌っている。

しかし、現実の生徒を取り巻く社会的環境は厳しいものがある。そんな厳しい社会の中でも明るくたくましく生きていく生徒を育てるためには、どのような指導をしていけばよいのであろうか。

近年、障害児の教育は、統合教育（インテグレーション）や交流教育の実践が進みつつある。障害をもつ子どもであっても、可能な限り、地域のなかで、健常児とともに、あたりまえの生活を経験することが、この子どもたちの発達を保証し実現するものであり、また、健常児にとっても必要であると考えられ、実践されてきた。

いかえると、この子どもたちの心身の特性を十分考慮した教育や指導が必要であり、形式的に健常児と同じように扱うことだけでは、かえって発達を阻害することになるであろう。また、一方小集団での限られた経験や保護的・受動的・指示的な教育・指導のあり方や家庭内だけの人間関係と生活経験だけでは、一人の人間としての自律的・自立的生活の態度を阻害する危険が潜んでいる。このことは、結果的には、地域社会のなかでの就労を含む自立的生活や社会参加を困難なものにするであろう。

そこで、本学級では、生活や経験を重視した教育内容を中心にした生活単元学習や作業学習の時間を教育課程の柱にして指導を行っている。

#### II 研究のねらい

生徒が将来、「社会的に自立して生活できる人に育ってほしい」これが一番の願いである。たとえ、障害をもっていても、人や社会とかかわりを持ち、仲間とともに生活を楽しみながら生きていってほしいと願っている。

そこで、「生活力を高める指導」を研究テーマとし、実践を通して考えていきたい。この研究のねらいは、実践を通して生徒の生活力を高めることであるが、そのために、生活力についての考えを深

め、どのようにして生活力を高めるのかその指導方法についても探究していきたい。

ここでは、子どものそれぞれの段階での生活や学習において、その子なりに自分の要求や力でその課題・状況に取り組む子どもを育てることをねらいにしている。そこには、できる（できない）ということより、むしろ、「・・・したい」、「・・・しよう」、というような子でも自身の情意面を「生活力」の基盤としながら、取り組んでいる。

### Ⅲ 研究の基盤

生活力とは、「生活課題を解決していく力」である。その解決していく力には、知識・理解、技能、情意の三面が考えられるが、特に情意面を重視している。そして、生活力を高めるためには、生徒が生活課題を解決する経験を多く積み重ねることが重要であると考え。

また、生活課題とは、「生徒が生活していくうえで直面する課題である。そして、学校生活では授業を含めた学校生活の中で直面する課題すべてが生活課題である。」と考える。

授業における生徒の学習目標は生活課題であるとし、生活課題を解決していくことを援助する指導仮説を設定して、指導にあたってきた。指導仮説とは、「個々の生徒の生活課題に関する実態を知識・理解、技能、情意の三側面にわたって分析し、そこから導き出された指導の手だてであり、生活課題を解決させていくための中心的な指導法である。」とする。

授業においてどのような生活課題を設定するか、その観点としては次のようなことがあげられる。

- ・ 今、最もできるようになってほしいこと。
- ・ 今、最もやらなければならないこと。
- ・ 今、最もできそうなこと。
- ・ 集団的に取り組みやすいこと。
- ・ 生徒の生活に密着していること。

生活力とは、「自分自身が今持っている力を十分に発揮して、生活課題を自分自身で解決していくことである。」とすることができる。今持っている力というのは、今までの生活経験や今までの学習を通して理解してきたこと、できるようになったこと、意欲、態度などである。

集団活動への適応性を養うことに視点を当て、より望ましいかわり合いの広がりや深まりを求め、指導の手立てを講じてきた。それは、教師の働き掛けの工夫、集団編成のあり方、教材・教具の工夫の3点である。これらの指導の手立てが、日々の実践のなかで、どのように生かされているのか常に把握しておかなければならない。

#### 1. 指導の手立てについて

##### (1) 教師の働き掛けの工夫

教師の働き掛けとして、言葉掛けや援助、仲立ちなどが考えられ、具体的には、援助的活動のかたちでかかわってきた。生徒の活動の広がり、学習課題への意欲と取り組みの持続を期待する時、どのような援助が大事になるか、日々の実践のなかで検討してきたところである。そのなか

で、生徒一人ひとりの学習に立ち向かう心の動きを的確にとらえること、学習のつまずきの原因を探ること、常にできる状況を作り上げていくとともに、共に悩み、一緒に活動していくことが重要であると考えた。ただ、教師が一人ひとりの生徒に対する接し方は、教師自身の個性もあり、必ずしも、同一視できないが、このような共通理解の基に生徒と接することにより、共感的なかわりにつながり、学習のレディネスの成立に結び付いていくことが実践より学んだところである。

## (2) 集団編成のあり方

望ましい集団活動を考えた時、個人がどのように自分の属している集団にかかわっているか、かかわれるかが重要になる。これは、集団の編成（グループの構成員）により、個人の力の発揮の度合いが異なることを前提としている。すなわち、その個々のもっている集団へ適応する力に応じ、集団内での人間関係や、かわりが違って来るわけである。その意味において、実践では、集団を構成するに当たって、積極的に他の生徒をリードする生徒と、励ましかかわりを受ける生徒とを組み合わせることにより、生徒同士のかかわりが深まっていけるものと考えている。しかし、集団編成をするに当たっては、教師側の意図と生徒自身の希望との調整で難しい面も多少あった。

## (3) 教材・教具の工夫

生活単元学習においては、生徒の成功感、満足感、成就感などを体得させることが大切であり、そのための教材・教具の工夫が必要である。教材・教具の工夫の視点としては、可能な限り具体物（実物）を大事にし、徐々に抽象化していくこと、学習の定着（主に技術的なもの）を目的としたもの、生徒の生活に結び付いているものとして考え、実践を進めてきた。そのなかで、教材・教具の段階や発展性が課題となった。すなわち、生徒の課題に対する習熟度合いや興味により、また、学習の定着の様子により教材や教具が固定的でなく、常に発展的であることが望ましいと考えている。特に、生活単元学習の場合は関連した活動のくり返しの単元であり、生徒の学習意欲を向上させる意味でも、より工夫が必要になる。

(1)(2)(3)を中心に試みた実践を2例取り上げて考察してみたい。

## Ⅳ 実際の取り組み

### 1. 実践(1)——お弁当を作ろう——

調理活動を中心とした単元は、日常生活と大変密着している。そこには、必要な材料の購入から後付けまで多様な活動があり、一人ひとりの興味や関心に合わせた活動を仕組むことができる。また、作る過程を分担するなど、友達と協力して進めることのできる活動も多い。

#### ① 調理活動で大切にしてきたこと

- 生徒自身の手で進められる活動であること。
- 作る過程を分担し合ったりして友達とかかわりを深めたりできる活動であること。
- 同じ活動をくり返すこと。

この場合は、時機をみて活動に新しさを盛り込んでいくような配慮をすることが大切である。

- 一人ひとりが喜んで取り組める活動であること。

② 調理活動をするに当たっての教師の願いと手立て

ア 生徒の実態を基にした教師の情意的な支え

- より確かな見通しをもたせるために、活動内容のイメージ化を図る。

本学級では、調理活動にマニュアル（手引）を利用して、自分の力で何とか課題に向かっていけるよう援助している。自分でできた経験や喜びを積ねることによってさらに、次への意欲が育つと考えている。

イ、生徒ができそうだ、やってみたいと思うような課題の設定

- 意欲をもたせる。

興味ある題材の提示や、楽しかったという満足感や自分にもできたという成就感を味わわせる。

ウ、生徒が自分の力で取り組む活動

- 活動に対する自信や見通しがもてるようにする。

エ、生徒による自己評価と教師の情意的な支え

オ、くり返しにより、豊富な体験

- 分担した仕事の手順がわかり、見通しをもって取り組むことができるとともに、技術の向上も見られるようになる。

③ 単元のねらい

ア、マニュアルや弁当表を手掛かりに、自分の力で弁当を作ることができる。

イ、任せられた役割を十分意識して、準備や片付けを最後まで頑張ってきたことができる。

④ 単元の考え方

本校は、給食の設備がなく、昼食は弁当である。そのため、昼食の取り組みが自由にできるので、調理活動に力を入れている。

2学期になってから、「きょうの卵焼きは、僕が作ったよ。」と言うY男の声や、「学校でとれたさつま芋で、お母さんと一緒に天ぷらをしたよ。先生も食べて。」と、天ぷらくれたK子の声が、昼食時よく聞かれるようになった。そこには、自分で作ったんだという満足そうな自信に満ちた笑顔があった。

また、本学級の生徒は、6人中3人がかぎっこで、午前中授業であった場合など作ってもらっていた弁当を食べるという状態である。そこで、簡単なものでも自分で作れるものが増えていけば、自分の好みで、弁当を作っていけるのではないかと考え、本単元を設定した。そこでは、弁当作りを楽しみ、生き生きと取り組む姿を願っていた。

⑤ 活動の様子

ア、導入時

弁当のなかみを調べたり、おかずを何にしようか、相談する時間を設けた。相談した結果、メニューは次のように決まった。

1回目 野菜いため弁当

11月18日・22日

ウィンナーいため ポテトサラダ  
野菜いため ごはん

2回目 ウィンナーまき卵焼き

11月25日・26日・30日

さつまいものにも 焼き肉  
キャベツのせんぎり 卵焼き  
ごはん

そして、誰が何を作るのかも相談させた。一人ひとりが責任をもって役割を果たすことを目的にして、できるだけ、一人一役となるように配慮した。

1回目の「野菜いため弁当」では、野菜いためはY男、ポテトサラダは女子4人、ウィンナーいためはH男と決まった。野菜のためは、材料も多く活動内容が多かったが、日頃から経験豊富なY男が、「僕に任せて。」と、積極的であった。ポテトサラダは、生徒に人気のあるメニューである。学校でじゃがいもを収穫した7月初旬にはよくじゃがいも料理を作ったが、その中の一つでもあり、A子は合宿時にも作っていた。

2回目の「ウィンナーまき卵焼き弁当」では、卵焼きはY男、キャベツのせんぎりはH男、焼き肉はA子とM美、さつまいもの煮物はM子とK子に決まった。ウィンナーをまいた卵焼きはY男のアイデアで、家庭で何回か作ったことのあるメニューである。さつまいもの煮物は学校でとれたさつまいもを使って何かできないかなと投げかけた時、M子が作ってみたいと言ったメニューである。

### イ、買 物

買物は、生徒の楽しい活動である。メモをしっかりと持っていたM子、買った品物を大事に持って帰ったH男とM美、「お釣りは〇〇円だった。」と、財布を見せてくれたK子、どの子も自信に満ちていた。買物に自信をつけていった生徒達であったが、Y男やA子は、家で自分から買物の役をかってでるなど、さらに意欲的になっていった。



### ウ、調理活動

日頃の調理活動では、友達の陰に隠れてなかなか自主性が発揮できないH男であったが、今回は、ウィンナーをいためる役になり、大変張り切っていた。こんがりおいしそうにいためていて、賞賛の言葉をかけると、満足そうであった。また、キャベツのせんぎりの役になった時には、事前に家庭で何回か練習し



て来ていた。家庭のフォローもあり、今までにない動きを見せてくれた。

#### エ、盛り付け

自分の弁当箱にできあがったおかずを各自盛り付けていった。汁が出るのを防いだり盛り付けやすいようにラップ類を使わせた。

「野菜いため弁当」の1回目の時、M美は、どういうふうに盛り付けしてよいかわからず、一つひとつ指示が必要であった。また、盛り付けた量も友達に比べて少なかった。2回目の時は、友達の盛り付けを見せたりしてさせてみたが、自信なさげにしていた。

反対に、M子は、てきぱきと盛り付けをしていた。大好きな焼き肉を盛り付けた時には友達のことを考えずにたくさん肉をとっていたので、A子やK子から注意を受けていた。自分が悪いとすぐ思ったのか、少なかったM美やH男にやる姿が見られた。

#### オ、反省

自分達で作ったお弁当、どの子どもとも嬉しかったようである。できたことを真先に田中先生に報告に行った姿（H男）、「3年生に自慢する。」と言っていた姿（K子）昼食時他学年の友達に作った弁当を見せていた姿（A子）などが見られた。

### ⑥ 単元をふり返って（配慮した点）

#### ア、生徒の発想を生かす

「ポテトサラダが作りたい。」「焼き肉が作ってみたい。」など、いろいろな希望が出てきた。そこで、品数を考えたりして、先に載せた二種類の弁当を作ることにした。生徒達は、これまでの経験や本を見たりして、意欲的に手順表作りに取り組んだ。

この場合、力量に見合うように活動を単純化したり付け加えたりして、当初の発想を生かして活動できるようにしてやるのが大切である。

#### イ、生徒に任せる活動を用意する

ポテトサラダ作りでは、初めは、女子4人で協力して作った。手順や方法がわかったところで、A子やK子には一人で作ってみよう、全て任せてみた。そうすると、1回目よりもやる気みせ、自分なりに工夫しながら調理を進めることができた。

このように、生徒の力に応じてまとまりのある活動を任せ、一人の力で作り上げることを経験できるようにしてやったことは、大変効果的であったと考える。そのことによって大きな成就感や満足感を味わい、活動への自信を深めることに繋がったのではないか。

## 2. 実践② ― 手づくり豆腐を売ろう ―

### ① 本単元で大切にしてきたこと

ア、できるだけ生徒の手によって作り上げることができ、その喜びが味わえるようにしたこと。

そのために、作業内容をできるだけ単純化し、生徒が自分達の手で作ったという自信と満足感が味わえるように配慮した。

イ、常に活動に対する意欲と見通しをはっきりとさせたこと。

そのために、ビデオや学級掲示、学年だよりなどによって、取り組みの様子を知らせた。

ウ、生徒同士の協力を大切にしたこと。

道具の準備や後片付けなどいろいろな場面での教師の励ましや声かけによって協力させる。エ、販売するという活動によって、人の前で話をしたり説明したりなど、人に働きかける力（社会性）を育てていくことに力を入れたこと。

## ② 単元の考え方

調理活動では、附中農園で収穫したじゃがいもや大根などの野菜を材料に使っていろいろな料理を作ってきた。その場合、一番ポピュラーな料理が味噌汁である。そこで、自分達で味噌汁に入れる豆腐を作れないかなと思い、豆腐作りを始めることとした。

豆腐作りでは、大豆をミキサーでつぶす、生豆を煮る、豆乳を搾る、にがりを入れる、型に入れるなど様々な工程があり、一人でなく数人で協力して豆腐を作る楽しみや喜びを味わうことができる。こうした活動によって、お互いが認め合ったり助け合ったりすることの大切さを感じてほしかった。

また、事前に手作り豆腐を試食していただいた先生方や保護者の方から注文に応じて販売するための豆腐（商品）を作ろうという目的でも行った。

## ③ 活動の様子

豆腐作りの学習を始めるに当たって、初めに、豆腐の作り方を学ぶため、手作り豆腐の工場見学に出かけた。生徒は、しだいに固まっていく豆腐を息をのんで見つめていた。そして自分達も早く作りたいという気持ちになっていった。

当初は簡単にできるものと考えていたが、失敗のくり返しが続いた。3回目までは何れも豆腐らしい形にならなかった。原因は、にがりの量不足、焦げつき、豆腐の温度保持の失敗であった。これらの条件を全て正確に満たさないと豆腐はできあがらないことが、失敗を通してよくわかった。そこで、後でも述べるように補助具ややり方を工夫していった。

生徒の中にもこの失敗を通して変化が見られた者がいた。M子は、豆腐作りに関心を強くもっていたが、家庭に帰り家族に報告できており、学校でも豆腐作りをするたびに、「先生大丈夫？」「上手にできる？」と教師に問いかけたり、心配してくれる態度が見られた。学校での学習や家庭での会話を通して、その日のできごとをより詳しく報告する力、記憶を継続し次回へ結び付ける力が確実に伸びてきたように思われる。これらの力は、この学習を境に顕著に見られるようになり、学校や学庭でのことをよく話すようになった。

4回目、型から出してみるのが不安であった。しかし、豆腐が固まっていたのを確認した時、生徒達は大笑声をあげ、喜びあった。

何回もくり返す中で、しだいに手順がわかってきて、自主的な活動が多くなり、教師の援助が必要ない時も多くなった。そこで、教師は、「だんだん上手になってきたね。」「〇〇君は〇〇さんがやるのを上手に手伝っているね。」などの声かけや励ましをして支えていった。

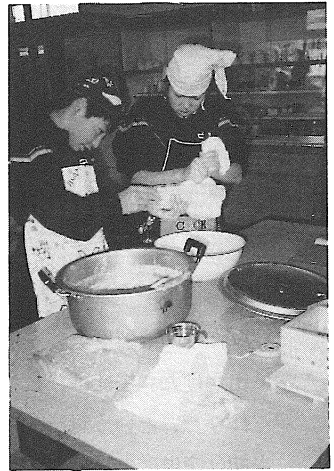
K子は、能力は高いが消極的な態度が多い生徒である。リーダーシップを発揮してもらうため、「班長」に推薦した。自分の仕事の他にも、全員をまとめることや掃除、ガスの元栓の確認など自分の責任を感じた行動が見られるようになった。

M美は、気分がむらがあり、根気強く作業を続けることができにくい面もある。豆腐作りでも、

一つの作業が終わるとぼんやりしていて、次の作業になかなか移れないでいたが、次は何をすればよいか具体的な指示を始めにきちんと出しておけば、作業していくことができるようになってきた。

他の生徒も数回の声かけで次の作業の用具をそろえたり、洗って片付けたりと、手順表や図表をもとに作業をしていくことができるようになった。真剣に取り組んだぶんだけ、15丁の豆腐が水に浮かんだ時の喜びは、どの生徒の表情や声にもはっきりと見えることができた。

豆腐作りでは、にがりを入れる時の温度や豆乳を煮る時間などがとても大切な要素である。そこを自分達だけでやるとなると大きな自信になるであろうし、豆腐が完成した時の喜びもより大きいであろうと考え、タイマーや印が付いた温度計を用意した。タイマーは興味が強かったのか、操作はどの生徒もすぐに覚え、よく利用した。時間を意識させる必要からも良い道具であった。みんなで準備したり、みんなでできようやることの相談をしたりしながら、自分達の手で取り組んでいけるように、また、自己評価をしてより頑張れるよう「作業ノート」を作り、個々に反省させた。自分達がやることに対する見通しをもたせるうえからも有効であった。



作った豆腐は、学校では、味噌汁の中に入れて食べたり、家に持ち帰り、おかずの一品になったりした。他学年の友達や家の方から、「おいしいね。」と言って褒められ、豆腐作りの楽しさを味わうことができた。

また、授業などでお世話になった先生方にプレゼントもした。この時、「もっとほしいから、買わせてくれない。」と言われ、次の豆腐作りをさらに頑張った生徒も見られた。

みなに認められ喜ばれるという経験を通して、行動に自信が付き、意欲的に活動するようになっていった。そこで、次の段階として、作った豆腐を売ろうと相談がまとまった。多くの方に作った豆腐やおからを買っていただくこうと生徒は相談しあった。そして、宣伝のポスターを作って校内に掲示する、注文表を載せたお願いの手紙を配る、直接注文をお願いに行くなどを実施した。その結果、たくさんの注文が届き、生徒達は喜び、注文に応えられるよう頑張ろうと励みしあった。

しかし、このような大きな取り組みに向かうことは、それだけ大きな困難や課題にぶつかるものである。「もうきょうは、これでやめたいな。」「明日は休みにしよう。」といった言葉が生徒から出てきた。こうした大きな困難を打ち破ってくれたのは、お客さんからのお礼の手紙や励ましの言葉であった。

第三者からの励まし（評価）をもらい、自分達のやっていることが期待されたり、楽しみにされていることがわかり、生徒達はまた、意欲をもって豆腐作りをすることができた。

そこで、意識的に第三者の反応を生徒に伝えるようにしてきた。保護者の方からの声は特にその子にインパクトが強く、大きな励みとなった。



手作り豆腐、そのままいただきました。柔らかくもなく、かたくもなく本当においしかったです。主人と私とで競争のようにして食べました。店で売れている物よりおいしかったです。みいちゃん、豆腐屋さんになれるわと言いました。(M子の母)

朝、味噌汁に使いました。つるつるじゃなくて、目がつまったというか、とてもおいしい豆腐でした。おからは、人参やこんにゃくとまぜ、今日の弁当のおかずに使いました。(Y男の母)

この間のおからは、ぶつぶつがありましたが、今日のはとても良いできでしたね。さっそく煮て食べました。作った物がすぐおかずに使われるのはとても嬉しいことです。(K子の母)

一年生のみなさんへ  
まようは おとうふを作っていただけで  
ありがとうごさいます。  
たいへんめずかしいかたちをしたおとう  
ふでしたので、さいしょ一年生はまようは  
かまぼこづくりをしちゃったのかなとおもって  
しまいました。でもひとくちたべてみて  
びっくり。おいしくて あまい おとうふの  
あじでした。  
ゆうしゅくの時、みんなでたべました。  
おもしろいことにすこしいれて、あとほそのまま  
おしゅうゆもかけないでたべました。  
○パイネンツクツクといぼっておしえて  
くれたので、みんなでてをあわせてかんしゃ  
しました。おもしろいおとうふありがとう。  
おかうもおいしかったです。おいしい  
おかうは、そのままくちにいれると、おまの  
あまいあじがします。ついついみんな  
つまみぐいをしてしまいました。  
こんどまたおいしいおとうふやおかうが  
できたら、おしえてくだまいね。つまみぐいに  
いきますから。  
○田 母より

生徒の様子を紹介する。

Y男は、くり返し作っていくなかで、要領を覚えていった。煮汁が沸騰してこぼれそうになる直前にガスを止めたり、焦げないようによくかきまぜたり、細心の注意を払って行った。販売に関心も高く、積極的に注文をとってきていた。また、電話で数を確認したり、自主的に売りに行ってくれた。その時、「〇〇先生はこう言われた。」とか報告もしっかりしてくれた。

A子は、おからを500gずつ計り、袋づめすることも一度指示を出せば後はきちんとやってくれたので、安心して任せられた。A子も喜んで注文の品を届けに行ってくれた。「じょうずにできているね。」と言って褒められ、400円のところを500円もらったと嬉しそうに報告してくれたこともあった。

この単元では、みんなで頑張るって良い物を作ろう、お客さんが喜んで買ってもらえる物を作ろうという意識をもたせながら取り組ませていった。その中で、人に認められ喜ばれるという体験を通して、より大きな満足感・充実感を味わうことができたと思う。

## V ま と め

「生活力を高める指導をめざして」をテーマに掲げ実践をしてきたわけであるが、指導の手立ては適切であったろうか。生徒が集団活動へ参加する力を少しでも身に付けることができたであろうか。

指導の手立てとしては、・教師の働きかけにおいては、援助的活動の形でかかわってきた。・教材や教具では、可能な限り具体的（実物）を中心に徐々に抽象化していき、学習の定着を図り、生徒の生活に結び付けていくことをめざした。

また、生徒が集団活動への参加能力を少しでも身に付けるという点については、個々の生徒がかかわり合いを広げ、深めることに主眼をおいた。そして、かかわりを多くもてるような場の設定を工夫していった。

子どもは、本来的に体を動かすことが好きである。しかし、興味や関心があり、自分にもできそうだと思うなければなかなか行動しない。この研究の過程で、子どもを見る眼の甘さや感受性の乏しさに気付かされた。しっかりと子どもを見つめなければと反省させられた。

今後とも、人とのかかわりを大切にしながら、生徒一人ひとりの生活力が高まるよう努力していきたい。

### 《引用・参考文献》

文部省「心身障害児の社会自立を目指した教育」1988

島根大学教育学部附属小学校・中学校「第14回障害児教育を語る会紀要」1992

島根大学教育学部附属小学校・中学校「第15回障害児教育を語る会紀要」1993

「第19回全特連中国地区大会（山口大会）発表資料」1992